

京都看病婦学校開設運動の再検討

——地域の支持形態に着目して——

田中智子

はじめに

『同志社百年史』通史編一（一九七九年。以下『百年史』と略）の各章の中でも、第九章「大学設立義捐金募集運動」（執筆担当…杉井六郎）は異彩を放っている。それは、第八章「同志社大学設立運動」とは別立ての章として、一八八四年四月に始まる「明治専門学校」設立募金からの運動経緯を、協力者の属性や地域的広がり注目して分析する視角を持っていることに所以する。

本稿が扱うのは、『百年史』が同じく一章分を充て、第十一章「京都看病婦学校と同志社病院」（執筆担当…長門谷洋治）として叙述した、京都看病婦学校創設の経緯である。後に関係が逆転するものの、当初は看病婦学校が主、同志社病院が従の関係にあり、また両者は一心同体であったので、本稿では以下、病院を含むものとして京都看病婦学校設立史と称することにする。

その概要は、戦前の佐伯理一郎編『京都看病婦学校五十年史』（一九三六年。以下『五十年史』と略）によってま

とめられ、同冊子が以降の叙述の基礎となった。四十余年後に『百年史』が刊行されてからは、看護教育史的な視点からこの学校の位置付けを試みる亀山美知子などの論考が出された⁽¹⁾。一方、河野仁昭が、大学設立運動の経緯を新島襄の動きに即して精緻化し、その流れのなかで看病婦学校設立問題にも言及した⁽²⁾。さらに近年は、小野尚香らがアメリカン・ボード関係の史料を用い、宣教師団・宣教師側の考え方に目を向けている⁽³⁾。

本稿では、京都看病婦学校が行政当局あるいは民間から得た支持に注目し、開校に至る過程を再考することにする。学校の設立に際しての京都府との折衝、京都や神戸における寄附金募集の事実は知られているが、大学設立運動に比べても、地域の動向は明らかではなく、その実態・特性を追究する余地がある。

看病婦学校設立の立役者、医療宣教師 John C. Berry (以下ベリー) がアメリカン・ボード本部に書き送った書簡は、詳細な事実経過、そして日本側の人脈や動きを具体的に知る上でも重要である。かつてこれを活字に起こすとともに、簡単な抄訳を付したのが坂本鈴子であった⁽⁴⁾。その後、『百年史』や小野もこれに依拠して研究を進めてきている。本稿も坂本の功績から多大な恩恵を被ったが、例えば府県の組織や教育機関といった、日本側の行政・教育事情に通じなくては訳出できない語については誤りを含み、正確な語義の確定が必要である。

史料面からいえば、何より『五十年史』が叙述の根拠を示しておらず、事実誤認の可能性をはらんでいる点も無視できない。京都看病婦学校設立の経緯には、未だ知られていない事実も多いと想像される。

学内文書、加えてアメリカン・ボード宣教師文書などの活用により進展してきた同志社史研究の水準は、高く評価できるものであるが、決定的に不足しているのは、日本側史料の収集——特にキリスト教関連以外の新聞・雑誌記事の検索という基礎作業である。それは、地域史・日本史として同志社史を捉えるという発想が薄かったことと表裏一体の関係にあるだろう。この点、前掲「大学設立義捐金募集運動」も、学内文書と徳富蘇峰の『国民之友』に史料の

根拠を求めるにとどまっている。本稿では、新たに新聞・雑誌記事をはじめとする地域の側の史料を集め、事実の確定に努めたい。

留意すべきなのは、同志社に関わる他の学校設立運動の存在である。大学設立義捐金に引き継がれる「明治専門学校」設立のための募金活動は、一八八四年六月から開始されていた。一方仙台でも、看病婦学校とほぼ時を同じくして、同志社「分校」とみなされた宮城英学校（後に東華学校と改称）設立募金活動が展開していた⁵⁾。これらと比較したときに、京都看病婦学校の設立運動に対する地域行政・地域社会の関わり方は、どのように評価できるのかということも考えよう。

なお、募金に関わる新聞記事については、長文のものを除き、末尾に史料編として収載した。年代順に（A）～（D）の記号を付し、本文中、適宜参照している。

一 京都における支援の実態

1 募金活動

看病婦学校の設立は、医学校のそれに付随して思い描かれるものであった。

新島襄の医学校設立構想は同志社創設時にさかのぼり、①府議伊東熊夫を中心とした府会による新島への京都府医学校委譲計画（一八八二年五月）、②ペリーと新島による「京都民立医学校」計画（一八八三年一月）、③ペリーによる超教派連合医学校計画（一八八三年四月以降）など、具体的な諸構想が持ち上がったのは挫折していく紆余曲折の過

程があるが、ここでは、一八八四年四月に一時帰国したペリーと欧米周遊に出かけた新島が、翌年年末にそれぞれ日本に戻ってからの経緯を追う。

それ以前の概略は以下の通りである。「京都民立医学社」計画は、すでに医学校・病院と三位一体となった「看病婦人学校」の設置を構想しており、二人が渡航する以前の「一八八三年四月より、すでに山本覚馬や中村栄助などを加え、看病婦人学校設立に向けての相談が始まっていた。ペリーと新島は、日本を離れている間もそのための活動を怠らなかつた。二人は医学校設立のための募金活動を行うかたわら、一八八五年五月九日にはニューヨークで看病婦人学校につき面談し、直後にペリーは、アメリカン・ボード本部に対し、看護教育のために Linda A. J. Richards (以下リチャーズ) や Sara C. Buckley (以下バックレー) の京都赴任を推していた。⁷⁾

一八八五年十月、ペリーはアメリカを發ち日本に向かうが、西海岸から發信した十月十六日以降、翌年一月十二日の岡山からの發信まで、アメリカン・ボード本部に向けての書簡はしたためられなかった、あるいは現存していない。ゆえにその間のペリーの動きを追うことは困難であるが、医学雑誌により、十一月五日に東京を出發し、十四日、中山道經由で京都に到着したことが伝えられている。⁸⁾ ペリーは横浜に上陸後、東京に立ち寄り、その後、西に向かったと考えられる。

『五十年史』は、ペリーが看護教育への理解を求めるべく、内務省衛生局長で大日本私立衛生会会長の長与専齋と面会し、衛生会京都支部長の半井澄を紹介されたと述べている。だが、長与は衛生会の副会頭であり、半井も京都支会の副会頭であつて、ペリーと長与が面談したことを示す直接の根拠も見出すことはできない。それでも、ペリーを迎えた京都の支会が、彼の来着を「本邦に看護学校を設け看護の學術を教授せんとすの計画」あつてのことと聞き知つているので、この東京滞在中に、ペリーが長与と出会つた可能性もないわけではない。

一方、新島は、十二月十二日に横浜に入港し、十七日に京都に到着した。⁽¹⁰⁾

両者は再び京都で合流し、一八八六年一月にはリチャーズが来日、二月には看病婦学校校地予定地所の買収に入り、四月には募金活動が始まる。実働面での中心となったのは中村栄助であった。

中村は府会議員であり、一八八二年五月、京都府医学校を暗に新島に委ねてしまうことを暗黙の前提に、京都府会が医学校費全廃を可決した折、途中で意見を翻して議決の方向を決定づけた張本人でもあった。⁽¹¹⁾その後、一八八三年年頭の「京都民立医学社」の結社にも加わった彼は、主にこの方面から力を發揮し、同志社支援の中核的役割を果たしていく。

一八八六年四月二十七日、新島は看病婦学校設立の旨趣草案を府議浜岡光哲に送り、彼が社長を務める商報会社での修正印刷を依頼⁽¹²⁾、本文だけで三千字を超える「京都看病婦学校設立趣旨」⁽¹³⁾（以下、「設立趣旨」と略）が出来上がった。「設立趣旨」は、校則・教則・舎則から成る「京都看病婦学校々則一覽」を添付するとともに、東京横浜および京阪神をはじめ各地方において、しかるべき社友を「京都看病婦学校寄附金募集委員」に任じ、募金を委託すること、および銀行などを通じた募金預かり方法を付言していることが注目される。発起人は新島・山本覚馬・中村・松山高吉・伊勢時雄の五名であった。

浜岡は『日出新聞』の経営者でもあり、すでに大学設立問題を通じて同志社に協力的な姿勢をみせていたが、『日出新聞』が看病婦学校の件において積極的な役割を果たしたとはいえない。そもそも本件に限らず、この時期の『日出新聞』は「募金」なる事業自体にあまり関心を寄せていないように思われる。例えば一八八六年末には、各地の新聞がノルマントン号の遭難者に対する義捐金募集運動を展開し、中には大々的に紙面を割く新聞社もあったが、『日出新聞』での扱いは決して大きくない。

こうしたことから、看病婦学校への募金集めは、中村個人の行動に多くを負いつつ始まったと考えるのが妥当である。ペリーは、中村が八月の終わりに次のように語ったと記している。「二か月前まで、富と地位のある人々は、キリスト教との関係ゆえに、同志社とその学校に対して強い偏見をもっていた。私がそこに正式に関わっていることに對してよそよそしかった。しかし看病婦学校設立を公然と演説するうちに、彼らは友好的に接するようになってきた。これら多くの人々の家で、病氣だとか不在だとか、私に会わない言い訳を聞いてきたが、驚くことに、客間に通され、名譽ある客人として扱われ、事業の説明は敬意をもって受け止められ、最後には、援助の求めに対して勇気づけられる応答がなされるようになった。¹⁵⁾」

九月二十日、大日本私立衛生会京都支会にてペリーと新島が演説したことは、その演説が別途冊子となって公刊された経緯もあって、よく知られている。その模様は、医学方面の雑誌記事において、少し詳しく報道されている。午後八時より十一時まで、下京第三組寶錦舎において京都支会の常会が開かれ、聴衆は二百余人、アメリカ人五人が来会していた。先立つ二人の演者の後、ペリーが「看病婦学校の入用なるを述ふ」、新島襄が「看病婦学校設立の主旨」と題して演説し、ペリーの分は浮田和民が訳読した。¹⁵⁾ 演説の最後は、「本校創立事務仮本部」新島襄宛の義捐金呼びかけで締めくくられている。「五十年史」は、このとき長与衛生局長が特別に出席したと記し、以後の研究もこれを踏襲してきたが、長与は九月十一日から病氣療養のため栃木県塩原に赴き、東京に戻ったのが二十三日というから、¹⁶⁾ 信憑性は薄い。

一八八三年五月に長与専齋らが設立した官民協力団体が大日本私立衛生会であるが、各府県に支部が置かれ、府県官や地域有力者の集合体となっていた。任意入会ではあるが、京都でも知事以下、主だった府属や府県會議員、医師らは、ほぼ会員になっている。一八八八年一月現在の名簿が残っているが、京都支会の会員は約百五十名、会頭が府

大書記官の尾越蕃輔、副会頭が半井澄、中村栄助は一八八四年三月時点ですでに地方幹事（会の旨意をその地方に普及し同志者を誘導加盟させる全国的役員）を務め、京都支会では評議員の座にあった。本稿で登場する府議伊東熊夫や浜岡光哲、府の衛生課長清永公敬、看病婦学校教師となった川勝原三なども皆会員であり、ベリーも一八八四年三月時点で、すでに岡山県の会員として名を連ねている⁽¹⁷⁾。京都支会は毎月常会を開いており、一八八七年二月にも、バックレーが「衛生一斑」と題する演説のひとつときを与えられている⁽¹⁸⁾。長与クラスの人物はともかくとしても、支会レベルにおいて、大日本私立衛生会という団体が、看病婦学校設立運動に資する存在であったことはたしかであろう。

京都での募金は計八回にわたって集約され、『五十年史』収載の寄附者一覧によると、四百十六名から計八百八十二円五十一銭が集まった。長浜教会からの分などもここに含まれる⁽¹⁹⁾。最高額が中村本人で五十円、次に知事北垣国道の三十円、府議の田中源太郎・浜岡光哲と新島襄からの二十円、府議高木文平と上下京区长竹村藤兵衛・杉浦利貞（連名）からの十五円が続く。知事は、寄附者のリストを送るようにはいい、府の主要職にある人々も個人的に寄附し、募金の努力も約束していたという⁽²⁰⁾。府会全体からみると、約九十人のうち五十人ほどの議員の寄附が確認される⁽²¹⁾。また、『五十年史』は、医師およそ六十名を含むと記すが、半井澄、新宮涼亭、大村達齋、前田松閣など、「京都医員一覧表」⁽²²⁾の上位に上がる医師らが、いずれも五円以上を寄附している。地元経済界の寄附者も多い。

以下は、一八八七年四月付で、新島がベリー、バックレー、リチャーズに宛てた手紙である。京都看病婦学校・同志社病院第一年次報告書、あるいはウーマンズ・ボードの機関紙『Life and Light for Woman』にも掲載され、原文、和訳ともに公にされているが⁽²³⁾、この間の事情をよくまとめているので、あらためて訳出の上、検討を加える。

ベリー博士、バックレー博士、そしてリチャーズ嬢へ

親愛なる皆さん、我々が看病婦学校について語り始めた折、京都や他の場所の人々はその重要性や有益さを十分に理解していませんでした。しかし、知事や副知事、そして有力市民は、あなた方の学校創設の試みに対してすぐに温かい共感を示してくれ、今や知名度の高い市民や有力医師らのほとんどが、学校基金に寄附してくれていることを、喜びをもってご報告できる次第です。

人々があなた方の事業の有益さと重要性を理解したのは、以下の点の助けによるものと思います。一つ目に、あなた方の診療事業の成功があります。多くの患者が、最高度に熟練し、行き届いた手当てを受けてきています。この点は高く評価され、しばしば京都の新聞上で世に広められています。二つ目に、昨年のコレラやチフスの流行により、医師や訓練された看病婦の必要性が強く認識されることになりました。そして、三つ目に、最近の東京における婦人慈善会活動があります。伊藤伯爵夫人が率い、看病婦のための学校の発足・維持を引き受けてきました。そしてさらに、京都における寄附者獲得という我々の成功は、主に我らの友、中村氏の努力に負うものだと、ことを付け加えるべきです。彼はその友人や知人の援助を、熱心かつ誠実に追い求めています。

目標金額 一〇二・六七ドル

すでに集まった金額 九〇二・六〇ドル

主の御名において、あなた方がよく訓練された生徒たちを送り出し、彼女らがこの地なりいずこなりの人々のかで働くようになればすぐに、あなた方の営みは十分かつ広く評価され、豊かな実りを確実に収穫することになると期待し、信じております。

同時に我々は、この前途有望な事業に対し、あなた方への積極的な共感と支援とを保証するものであります。

敬白 新島襄

京都 一八八七年四月

協力を得られた理由としてここに挙げられた点のうち、ベリーの診療活動の成功と一八八六年における伝染病の流行について検討しよう。

同志社病院の正式な開院は、一八八七年九月十七日とされるが、ベリーは京都に来て間もない前年二月には、すでに市中四ヶ所の教会において生理学や衛生学の口授を始めていたし、噂を聞きつけてやってくる患者に対する施術も行っていた。一八八六年九月には、Jerome Davis（以下デイヴィス）の家を拠点とした診察・教育が開始され、翌年三月には、東京で医学校を卒業し、帰ってきたばかりの京都府民、川勝原三を登用し、態勢を整えた。彼はクリスマスチャンであり、東京の教会からの紹介状をもってきたという。⁽²⁷⁾

新島が記す“Kioto Newspaper”とは、『日出新聞』を指すと推定できる。看病婦学校設立募金への直接的協力はみられないが、ベリーの診察に関しては、折々にこれを伝えていた。⁽²⁸⁾ 報じられるのは、主に難症「ソコヒ」（英名「カタラクト」、いわゆる白内障）が直った事例であり、当時の地域的需要にもっとも適った診療科目は眼科であったと思われる。一八九〇年代に入っても、同志社病院来院者の三割近くを眼病者が占め、最も多いことが報告されている。⁽²⁹⁾ また、診察対価に関わる京都の伝統的な風習「菓子料」と、それを拒否する西洋医ベリーのありかたも対比され、治療実績に加え、医療宣教教師がもたらした新たな文化が、地域でも支持を得はじめていることがわかる。

二点目の伝染病流行については、一八八六年の特殊状況を念頭に置く必要がある。コレラは前年から流行の兆しをみせていたが、この年は、一月から七月までに府下で二二九八名罹患し、一〇九五名が死亡、年間ではそれぞれ三二〇三名、二四九七名を数えるという大流行をみせた。⁽³⁰⁾ 五月には、府下の交通遮断や集会・興業の禁止が発令され、

京阪地域の諸新聞では、連日コレラの報道が続くこととなった。特に京阪兵庫の二府一県での流行が激しいことも報じられている⁽³¹⁾。五月十九日、京都府（丹後を除く）は、大阪府、兵庫県（但馬を除く）とともにコレラ流行地と認定され、解除されたのは九月十一日であった⁽³²⁾。腸チフスや発疹チフスも、五月以降特に流行し、避病院が設置され、年間で合計三八八七名が罹患、九五三人が死亡している。

以上のような一種の非常時にペリーの診察が始まり、京都看病婦学校設立運動も展開したのであり、医療をめぐるこの新規事業には追い風が吹いていたと考えられる。

2 府の対応と医学教育構想

学校を設立するには、府の認可を得なくてはならない。個人的な寄附を得るということとは別に、府の要人と交渉を行うことが必要となる。同志社に対する徴兵猶予の特典付与の件で、すでに新島襄は一八八六年二月から北垣府知事と面会の機会を得ていたが、北垣が新島と看病婦学校設立に関わって面談したと日記に明記するのは、同年四月十四日をはじめとなる⁽³⁴⁾。

北垣の日記、およびペリーの書簡によると、六月十日にも、看病婦学校をめぐる府庁で会談が行われた⁽³⁵⁾。そこには“Morimoto” すなわち府庶務課長の森本後凋一等属が臨席していた⁽³⁶⁾。ペリーはアメリカン・ボードの本部に対し、森本の地位を“the Shomuchō (general business manager) and scarcely second in importance to the Prefect”（庶務長。ほぼナンバー2の重要な地位）と説明している。そして、会談での森本の応答には、次のような一節が含まれていたことを知らせている。「この仕事がもし京都府の病院によって、あるいは非キリスト教の団体によって始められていたならば、どのような宣言や約束がなされたとして、私は支援しないでしよう。なぜなら、彼らの約束とは、単

に金を得るためのものとわかるでしょうから。しかし同志社が何か言ったときには、それは信じられるものです。我々はまさに同志社のような営みをもっと起こることを望んでいます。そして、キリスト教がその力の源泉であるならば、我々の施設、特にこうした種の学校には、聖書やキリスト教がもっと取り入れられるべきです。看護の仕事は、普通以上の力によって助けられるのでなければ、汚くて魅力のない仕事だからです。」

キリスト教への理解を示した森本に対し、「The chief of police」（警部長）は、社会から援助を受けられるようにするには、入学生が聖書を読めるようになることを要求される点は絶対に削除すべきだといい、「我々は父祖の宗教をすべて捨てて、異教徒の信仰を支持しろということですか」と森本に尋ねたともいう。当時の府警部長は財部莞で、年頭に赴任してきたばかりであった。

前節で引用した一八八七年四月の新島書簡が記す「副知事（Lieut-Governor）」なる役職は、現実には存在しないが、看病婦学校に関する折衝役となり、好意的な発言をしてきた森本一等属を指すのかもしれないし、知事に次ぐ役職となると、十円の寄附をした大書記官尾越蕃輔の可能性もある。

社長代理中村栄助の名で同志社病院、京都看病婦学校設立願が正式に知事に提出されたのは、一八八七年七月二十三日であり、それぞれ八月三日、十一日に認可が下りた。⁽³⁷⁾

一方、医学校を設立したいというかねてからのベリーと新島の夢は、費用の面において険しい道のりを歩まねばならなかったが、ロンドンの豪商 J.T.Morton（以下モートン）や、Edinburgh Medical Missionary Society（エジンバラ医療宣教会、『五十年史』では「北英国医師伝道会」）からの支援の見込みを得て、勢いづいた。京都府との折衝は、看病婦学校の範疇を超え、医学校設立問題においても具体化していくこととなった。一八八六年七月二日の北垣との面会の場で、新島は医学校設立に対しモートンからの支援申し出があったことを告げた。⁽³⁸⁾ 医学校構想を聞いた北垣は、

西日本においてこのような医学校はなく、カリキュラムのコピーを渡してくれたなら、上京した折に文部大臣森有礼と会ってこの件を話し、具体的には、府医学校に代わって同志社を援助するため、地方税から補助金を与える権限を求めると伝えたという。ペリーは、その額は年間五千円を下らないと考え、このような府庁の庇護は東京では望むべくもないと捉えている^⑩。神戸、岡山と拠点を移してきたペリーであるからこそ、地方長官ならびに府県官の支持が成功への鍵であることはよく理解していた^⑪。そのペリーが、医学教育機関設立の場として京都を最適とみなしたということは、府の対応に対しても高い評価を与えていたということになる。

京都府医学校は、卒業生が無試験で開業できる甲種医学校の認定を受けていたが、運営は安泰ではなかった^⑫。また、授業では、ドイツ流医学テキストの翻訳の筆写しか行われておらず、不満が生じ、今年すなわち一八八六年いつぱいで予算は打ち切られることとなったとペリーはいう^⑬。だが、毎年予算削減が問題になることはあっても、一八八二年の折以外、京都府会が医学校費を全廃した事実はなく、彼の勘違い、もしくは希望的観測だと思われる。

ただ、府医学校費を同志社への補助金へと転用するという具体案を北垣が口にしたということは、彼が同志社の存在を前提に、ある程度本気で府下の医学教育再編を考えていたということになる。当然、四月に発足したばかりの高等中学校医学部制度のことが念頭にあったはずである。年末の府会審議にもみるように、この文部省の学校が京都に設けられるのなら、維持に苦慮してきた京都府医学校は不要であるという見解が存在していた^⑭。加えてかたや、同志社の医学校もできるのであれば、なおさら府の医学校の存在意義には疑問符が付く。医学校費を廃止し、それより安い補助金の出費により同志社の医学教育を援助するという思い付きもありえただろう。

しかし現実はそのようではなかった。翌年一八八七年八月に、国自体が地方税からの府県医学校費支弁を禁じる勅令を發布し、京都府医学校も、地方税を使って存続させることはできなくなった。一八八二年に府会の決議を覆し、原

案執行措置をとってまで府医学校を存続させた北垣は、今回も療病院費という費目で経費を捻出し、寄附金を加えて府医学校を維持する道を模索した。結局彼は、かつてと同様、府下の医学教育を同志社に委ねてしまう判断は下さなかつたのである。ここには、高等中学校医学部が京都ではなく岡山に置かれてしまった現実も作用していよう。ただし北垣は、全体としての府下医学教育の発展は好ましいと考えており、同志社による医学教育実現への応援姿勢は継続したということになるだろう。

森文相の下での学校制度改革により、先行き不透明な時期における北垣の迷い、いいかえれば多様な発想が、同志社の医学校設立問題をめぐっても発露し、それが好意的な対応につながっていたといえるのである。

二 募金活動の広がり

1 神戸

看病婦学校設立のための運動は、地元京都で行われただけではなかつた。『五十年史』は、開業医川本泰年が率先して神戸でも募金が行われ、九十三名から計百五十七円七十銭という「好成绩」を挙げたとしている。額にして京都の六分の一強、人数では四分の一弱ということになる。身近に設立される学校のためではない神戸の寄附金は、どのようにして集められたのだろうか。

一八八六年九月中旬から、神戸の地元紙『神戸又新日報』には、史料（B）にみる募金広告が連日のように掲載さ

れた。川本に加え、木村強・小磯吉人の名が記されている。新島襄はすでに四月十六日、神戸教会の川本と原田助に
対し、看病婦学校創立委員となって協力するよう求めていたが、さらに七月六日、神戸に赴き、募金の件で川本・木
村・小磯の三者に面会した。⁽⁴⁴⁾新聞紙上の広告は、三者が新島からの依頼を実行に移したものと考えられる。

川本や木村は三田出身のクリスチャン医師で、かつて神戸病院を拠点に医療伝道を行っていたペリーの直弟子であ
り、同じく神戸病院にて研鑽を積んだ小磯を含め、すべて神戸教会の信徒であった。川本は神戸での最高金額十五円
を寄附し、木村と小磯も五円を拠出している。

新聞上に広告されたこの募金趣意書は、他の地域には見られない。四月に新島が作成した「設立趣旨」は、かなり
の長文であったから、その趣旨を損なわない範囲で、広告スペース内に収まるダイジェスト版を、川本らが独自に作
成したものと考えられる。ナイチンゲールのくんだりは省き、医療の進歩に比した日本での看護術の遅れ、欧米におけ
る看護教育の現況、京都での新島らによる学校設立の動き、リチャーズ来日の好機に触れ、新島のいう「社会公共ノ
為メヲ謀ラントスルノ義挙」に対する兵庫県下の賛同・寄附を期待している。神戸で活動していたペリーへの言及―
「此病院ハ前二神戸万国共同病院長兵庫県病院臨時出張医士及岡山病院顧問等ノ職ニ在リシ米国医学博士ペルリ氏
ノ管理スルモノトス」は、地元の関心や共感を呼び起こすためには削れないくんだりであったろう。

また、三者に加え、呼びかけ人の欄に五州社の名があり、寄附の窓口となつてることが重要である。五州社とは、
『神戸又新日報』を刊行する新聞社である。⁽⁴⁵⁾『五十年史』によれば、自身も広告料の非徴収という形により、川本と並
び十五円の最高金額を拠出している。さらに募金広告が打たれて以降は、一円以上の寄附者名を逐次紙面に掲載した。
例えばそこには、『五十年史』の記録には残らない牧野伸顕の名も挙がっている。⁽⁴⁶⁾牧野はこのとき兵庫県大書記官を
務めており、川本らと新島が面会した七月にその名が口にされ、新島からも手紙を送っていたようだ。新島が神戸で

内大臣三条実美に面会し、十円の寄附を得たことは知られているが、牧野はその額を超え、川本と並ぶ神戸での最高額、十五円を寄附したのであった。

『神戸又新日報』は一八八七年十二月十八日になって、「京都看病学校並病院創立費寄附金報告」とし、看病婦学校・病院の名により、十一月付での神戸における寄附者計百十七人の一覧を掲載している。看病婦学校開業式のほぼ一ヶ月後のことであり、これをもって、五洲社を窓口とした募金に一区切りをつけるとの意味合いがあったのかもしれない。なお『五十年史』は、神戸での寄附者を九十三人、総計百五十七円七十銭としている。両者の一覧を対照すると、牧野のほか、兵庫県少書記官村野山人、ベリーの弟子であったクリスチャン医師山田良斎、あるいは複数の女性名などが『五十年史』には漏れている。一方、『神戸又新日報』の寄附金報告一覧も、十月三日に報じた知事内海忠勝からの寄附を収載していないなど、情報に不備があり、神戸での寄附者の完璧な確定は難しい。

ともあれ、内海知事・牧野以下県官、県議、医師、クリスチャンの名が確認できる点は、京都と同様である。半数以上の議員が寄附した京都府会には及ばないが、兵庫県議の寄附者は全議員の二割弱である。ベリーの神戸在住時代の人脈から発展し、クリスチャン医師が中心に動いたこと、新聞社の協力が地元京都よりはるかに積極的であり、寄附金の窓口となった唯一の一般紙となったことなどに、神戸の募金活動の特徴を認めることができる。

2 岡山

『五十年史』は、京都と神戸における募金の事実しか伝えていない。しかし岡山の新聞『山陽新報』は、神戸より早い一八八六年五月下旬段階で、史料(A)のような募金呼びかけの広告を掲載している。新島の「設立趣旨」付言に忠実に心える形で「岡山地方寄附金募集委員」となり、募金の窓口を務めているのは、加藤壽と石黒涵一郎の二名

である。

加藤は、一八八一年に岡山教会で金森通倫から洗礼を受け、翌年より一八八五年まで、同志社神学部別科にて学んだ。卒業後、新島の秘書を務めたといい、一八八七年九月からは同志社及び同志社予備校幹事の職にあったとされる人物である。⁽²²⁾石黒は代言人であり、山陽自由党の結成メンバーとして、岡山の民権運動を中核的に担ったが、山陽英和女学校の開設に尽力し、石井十次の岡山孤児院への協力でも知られる。⁽²³⁾岡山医学校時代のペリーは、神戸時代のようにクリスチャン医師の弟子を養成することはできなかった。⁽²⁴⁾加藤も石黒も、ペリーの薫陶を受けた医師ではなく、岡山教会の一般信徒である。

岡山では、神戸のように独自の趣意書が作成・公表されることはなかったとみられる。また『山陽新報』も自ら寄附窓口となることはなかった。しかし五月二十五日から三十日にかけて、規則も含めた新島の「設立趣旨」全文を連載している。また六月二十四日には、「看病婦養成の急務を論じて旁らリチャード嬢の篤志に及ぶ」と題する千八百字余りの社説を載せた。ナイチンゲールの話に始まり、婦人慈善会や愛生社など東京における看護法習得の気運、京都での看病婦学校設立の動きに触れるとともに、目下のコレラ流行に際し、岡山滞在中の校長リチャーズが避病院看護婦となることを県庁に出願したとして、当代のナイチンゲールであると称揚、日本人女性に発破をかけるものである。

そもそも岡山における『山陽新報』は、ステーション所在地の新聞として、アメリカン・ボード宣教師の動向をしらばし報道してきた。一八八五年末のペリー再来日についても、「ペーレイ氏」と題し、京都で私立看病人学校を設立する由と報知している。⁽²⁵⁾

京都看病婦学校の開業式が行われた一八八七年十一月から十二月にかけての『山陽新報』は現存せず、募金の結果

も含めて、報道状況を確認できないのが残念であるが、『神戸又新日報』に次ぎ、協力的立場にたつた地方紙と位置づけることができよう。

3 大阪

新島が大阪での募金も企図していた事実は、五月十四日に大阪教会牧師の宮川経輝に相談していること、七月三日には、本件に関し、大阪府知事建野郷三への紹介状を北垣京都府知事に依頼していることからわかる⁽⁵⁶⁾。

大阪在住者からの寄附がなかったわけではないことは、新島のメモからも明らかである⁽⁵⁷⁾が、そもそも大阪という単位による募金形態が立ち上がったかどうか、どれほどの醸金があったのかなど、ほとんど不明である。新聞社の役割についていえば、『大阪日報』や『大阪朝日新聞』が募金広告を掲載したり、その窓口になったりしている形跡はない。真偽のほどは不確かながら、大阪の新聞は、「当大阪にても同様の学校を創立せんと有志者が此頃募金なし居る」と報道しており、医学雑誌も、「看病婦学校が」追々大坂にも設立せらるゝの計画なりと」⁽⁵⁸⁾と報じている。大阪は伝道・教育面において、京都への対抗・独立意識が強⁽⁵⁹⁾く、京都の看病婦学校設立への支援となると、あまり盛り上がりなかつた可能性はある。

4 東京

一八八六年五月十九日、仙台に向かう途中で東京に立ち寄った新島は、島田三郎に対し、『毎日新聞』に看病婦学校設立旨趣書を掲載してほしいと告げた⁽⁶⁰⁾というが、同紙上には記事が見当たらない。また、『国民之友』の創刊も一八八七年二月のことであり、看病婦学校について報じることはなかつた。

ただ、東京で寄附金集めに協力した新聞社が皆無だったわけではない。『基督教新聞』を発行する警醒社は、史料(C)に示すように、一八八七年三月になってから募金広告を掲載し、取次窓口となって募金に協力し、以後の動向についても報じている。⁽⁶¹⁾

一方、東京に関して特記すべき点は、婦人慈善会との連携である。⁽⁶²⁾

一八八二年、イギリスで医学を修めた海軍軍医高木兼寛により有志共立東京病院が開設された。病院は盛況であったが寄附頼みの経営に苦しんでいたところ、相談をもちかけた参議伊藤博文の提案により、高木は天皇に謁見、病院の総長に有栖川宮熾仁親王を戴く。そしてその妃董子を総裁に、華族夫人らを中心とした婦人慈善会が結成され、鹿鳴館でのバザーなどを通じた後援組織となった。一八八五年四月、伊藤博文の妻梅子以下、六名の婦人慈善会員は、「看護婦教育所設立之大旨」とその設置案をまとめ、七月には八百四十人の賛同者を集めて設置費用約六千五百円を寄附した。これにより、十月には有志共立病院に日本初の看護婦教育所が誕生したのである。

看護教育をめぐるこうした東京での動きと京都看護婦学校の開設とは、従来別々に捉えられてきたが、両者には次のようなつながりがある。

明治天皇は、孝明天皇二十年式年のために一八八七年一月二十六日より京都に滞在したが、これに随行したのが首相兼宮内大臣の伊藤博文であった。二月九日、博文に伴っていた梅子は、海軍軍医総監の高木が京都尋常中学校で行った女子の衛生に関する演説を聴いていたという。⁽⁶⁴⁾そして二月十九日、博文・梅子夫妻は、北垣知事の案内で同志社を訪れている。⁽⁶⁵⁾三月九日、上京中の新島は高木を訪ね、また十一日には伊藤梅子にも面会し、看護婦学校について頼みごとをしている。⁽⁶⁶⁾

四月二日に、京都婦人慈善会発会式が京都倶楽部にて開かれ、新島襄・八重夫妻が参加したことが知られている

が、この慈善会は、「婦人は第一慈善を重すべきものなれば東京慈善会に倣ひて各裁縫其外の物品を販売して之を基本となし貧窮のものを救助することよからん」が、まずは月十錢ずつの積立金を成し慈善の糸口とすべきとして、百名ばかりが集まり、三月五日に発起した組織であった。⁽⁸⁷⁾趣旨を述べたのは北垣知事であり、伊藤梅子を会長に推薦し、副会長には北垣夫人多年を選出、京都在住の華族にも声がかげられた。また府属や府議が務めた諸委員のなかには、会計係として中村栄助も含まれていた。

以上の経緯によって、高木の事業を支援し看病婦教育を実現した婦人慈善会の中心人物、伊藤梅子の京都訪問をきっかけとし、知事北垣国道や府属の肝いりにより、同様の婦人慈善会が京都にも誕生し、そこに新島夫妻や中村栄助も関わっていたという人脈が見えてくる。

そして『五十年史』によると、一八八九年一月、中村栄助の妻はるを筆頭に、大沢善助や金森通倫の妻ら計七名が、京都看病婦学校の寄附金募集委員となり、趣意書を作成して追加の募金活動を行った。この月、百三十名を集めて開かれた京都婦人慈善会の年度初会⁽⁸⁸⁾との関連は定かではなく、京都婦人慈善会と京都看病婦学校の関係は、今後の検討課題である。また、東京の婦人慈善会についても、新島らが求めたものが、助言のみだったのか募金の協力も含めてであったのかなど、気になる点も残る。しかし全体的状況として、上流社会を中心とした女性の慈善活動という文化が、東京の婦人慈善会の伊藤梅子を通して京都に波及し、京都看病婦学校設立の動きに力を与えたことは間違いないであろう。

むすびにかえて

一八八七年十月、京都と神戸では、地元紙上に、寄付への感謝と開業式への招待を告げる史料（D）のような広告が掲載された。⁽¹⁾ 式次第は以下の通りである。⁽²⁾

唱歌／祈祷・ゴードン／歓迎の詞・中村栄助／看病婦学校設立の来歴・高松彝／同校の目的・新島襄／病院と看病婦学校の関係・バクレー〔Buckley〕夫人／祈祷・松山高吉／唱歌・同志社女学校生徒／祝文・北垣京都府知事／祝詞・米国全権公使ハパアルド〔Hubbard〕／同・米国領事ヂヨニガン〔Jemigan〕／祝文・下京区長竹村藤兵衛／同・上京区長杉浦利貞／同・半井澄／同・田中原太郎／同・西村七三郎／英語唱歌／演説・金森通倫／祝詞・デウキス〔Davis〕

開業式の模様は、京阪各地の新聞で伝えられているが、京都の『日出新聞』がもっとも詳しく報道している。⁽³⁾ 招待客のみならず、一般にも縦覧を許可し、門は花のアーチと交又させた国旗で飾られていた。式次第に挙がる人物以外にも、府属の板原直吉・清永公敬衛生課長が臨席していた。田中原太郎（代読田宮勇）は府会議長、西村七三郎は府会区部会議長である。京都府医学校長兼療病院長から開業医に転じた半井澄が祝詞を述べているが、猪子止戈之助新療病院長も顔を見せ、そのほか医師、新聞社員、有志らが集っていたという。バクレーとハバードについては浮田和民が、ジヨニガンについては金森通倫が訳読を行った。そして来客は引き続き、開業した同志社の書籍館へと足を

運んだ。

『百年史』は、一八八七年十一月二十一日の“Kobe Chronicle”がこの模様を伝えたとし記しているが、“Kobe Chronicle”の発刊は一八九一年であり、この当時はまだ存在しない。居留地新聞“The Higo News”同日号に記事が掲載されており、これを誤解したものと思われる。開業式における各演説の内容は不明であるが、“The Higo News”は、北垣の祝文に「しっかりとした道徳的人格がなければ、看病婦が専門的訓練を受けても社会に対してほとんど益をなさないだろう」との趣旨が含まれていたことを伝え、全体の光景を「博覧会」のようであったとしている。

当日は、寄附金報告も配付されたというが、『五十年史』の示す全体の決算表によると、国内有志から千三百四十四円三十二銭、海外から六千五百五十銭（内訳＝ウーマンズ・ボードより五千三百六十円、エンジンバラ医療宣教会より五百十四円、アメリカ人個人より二名二百三十一円五十銭）が集まった。⁽²⁵⁾ 国内からの寄附は主に地所買入れに、海外からの分は主に建築費に充てられた。

こうして正式に発足するに至った京都看病婦学校をめぐる本稿の考察をまとめておこう。

京都では、伝染病流行を機とした医療・衛生への関心の高まりと、教育制度の転換期における府の好意的な対応を背景に、地域有力者の中村栄助が募金活動を展開した。運動は地元京都にとどまらず、ペリーの活動前歴があった神戸や岡山において、クリスチャン主導による募金活動が行われた。そこでは、アメリカン・ボードの動向を報じてきた新聞社も協力的姿勢をみせた。特に神戸は、ペリーの弟子であった医師を中心に寄附金が集められ、まとまった成果を挙げた。なお東京に対しては、キリスト教界からの協力以上に、看護教育実現に関わった活動歴のある婦人慈善会との連携が期待され、その影響を受けることとなった。

さて、同じく一八八六年から翌年にかけての仙台では、五千円の募金目標が掲げられ、『奥羽日日新聞』が、宮城

英学校（東華学校）設立募金のキャンペーンを張っていたことが想起される。それと比べれば、神戸・岡山という地域の広がりがあったにせよ、京都の動きは盛り上がりや欠いたと言わざるをえない。

東華学校は、校長が新島襄、アメリカン・ボード宣教師が教鞭を執りつつも、運営団体東華義会の会長には県知事、役員には県官や地元財界の面々が就任し、いわば「半県半民」の学校であった。募金の主体は地域有力者の集団であり、在京の元仙・台藩士からも寄附が相次いだ。一方の京都では、一八八三年の「京都民立医学社」構想段階で、府知事・区長・府会議長が監察員を務めるなど、府政サイドを運営陣に組み込む類似の発想があったが、看病婦学校には引き継がれなかった。⁽⁷⁶⁾新島は民間からの募金の存在を重視し、「京都」看病婦学校と名付けはしたが、その設立運動は「地域の運動」ではなく、あくまで「同志社の運動」にとどまったといえる。

とはいえ、一部有志からの個人的醸金の受取というレベルを超え、中村がいうように、「同志社のために京都で試みた最初の公的募金」⁽⁷⁸⁾と位置づけられることはたしかであり、その意義は大きい。

「明治専門学校」設立のための募金活動はすでに一八八四年に始まっていたが、渡航した新島の不在もあり、近辺関係者を越えた地域・対象へと本格化するのには、一八八八年である。この大学設立義捐金募集運動に際しては、民友社の『国民之友』が要となり、新聞社を束ねる新聞社として音頭を取った。だが看病婦学校設立の募金に際しては、地域紙はそれぞれのスタンスで関わるにとどまり、横の連携には至らなかった。多数の雑誌・新聞社が参加し、中央政界も射程に収めた大学設立運動のように、「全国民の力を藉り」た「ナショナルな」⁽⁷⁹⁾うねりとはなるべくもなかった。だがその運動は、徳富蘇峰という強力な協力者の登場以前において、医療衛生史・女性史的な背景に支えられ、自動的に広がっていった。そこで地域行政や社会との間に築かれた関係は、大学設立運動の素地となったのではなからうか。

本稿では、残された少ない手がかりからではあるが、京都看病婦学校設立運動に関し、具体的な行政担当者の顔や社会的人脈などを明らかにした。従来の実証水準は超えられたものと思う。また、教育のような地域の公的事業・近代化を進める主体として、新聞社（マスコミ）という勢力の存在意義も指摘したつもりである。以上の成果をもって、一八八八年に最高潮に達する大学設立義捐金募集運動を再考することが、次の課題となる。

注

- (1) 亀山美知子「わが国初期看護教育における京都看病婦学校の位置づけについて」(『同志社談叢』第三号、一九八三年) など。
- (2) 河野仁昭「新島襄の大学設立運動」(一)(二)(『同志社談叢』第九・十号、一九八九・一九九〇年)。
- (3) 小野尚香「医療宣教師ペリーの使命と京都看病婦学校」(同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師 神戸・大阪・京都ステーションを中心に、一八九〇～一九九〇年』教文館、二〇〇四年)、同「京都看病婦学校と同志社病院」(一)(二)(『同志社談叢』第二十八・二十九号、二〇〇八・二〇〇九年) など。後者は、看病婦学校教師となった宣教師リンダ・リチャーズを支援するウーマンズ・ボードの機関紙「Life and Light」から関連記事を抜き出し、訳出したものである。
- (4) [JOHN C. BERRY 書簡集 (1871-1886)] Vol. II, III (一九六六年)。
- (5) 拙著『近代日本高等教育体制の黎明——交錯する地域と国とキリスト教界』(思文閣出版、二〇一二年)の終章「諸学校 令下の高等教育体制再編——東華学校(＝半県半民・同志社分校)の射程」を参照。
- (6) 『同志社百年史』通史編一、第十一章「京都看病婦学校と同志社病院」ならびに前注拙著の第四章「京都府下の医学教育 態勢と新島襄の医学設立構想」を参照。
- (7) [新島襄英文日記 1884.9.28～1885.6.5] (同志社大学同志社史料センター「新島遺品庫」史料番号一〇六)、同志社大学人文科学研究所蔵「アメリカン・ボード宣教師文書」マイクロフィルム内のBerry to Clark 1885.5.14。以下、同マイクロフィルム所収のペリー発ボード本部クラーク宛書簡については、同様に表記する。

- (8) 『東京医事新誌』 第四百三号(明治十八年十二月十九日。以下、和文の新聞・雑誌の刊行年は和暦表示とする)。「五十年史」が九月に日本帰着としているのはあやまりである。また、「同志社記事」(新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』1 教育編、同朋舎出版、一九八三年に所収)はペリーの入京を十二月としている。
- (9) 『大日本私立衛生会雑誌』第十九号附録「会員氏名表」(明治十七年三月十九日現在)、および三十一号(明治十八年十二月十九日)などより判明。
- (10) 一八八五年十二月二十日付徳富猪一郎宛新島襄書簡(『新島襄全集』3 書簡編1、一九八七年に所収)。以下の経緯の概略は、注(6)『百年史』第十一章を参照。
- (11) 注(6)拙著第四章参照。
- (12) 浜岡光哲宛新島襄書簡(前掲『新島襄全集』3)。同書注は、浜岡が社長を務める商報会社で「設立趣旨」が印刷刊行されたとする。
- (13) 『同志社百年史』資料編二に所収。
- (14) Berry to Clark 1886. 8. 26
- (15) 『京都医事雑誌』第十八号(明治十九年九月二十五日)。
- (16) 『東京医事新誌』第四百四十二・四百四十四号(明治十九年九月十八・十月二日)。
- (17) 注(9)「会員氏名表」、明治二十一年一月現在 大日本私立衛生会会員氏名表」。
- (18) 『東京医事新誌』第四百六十四号(明治二十年二月十九日)。
- (19) ただしここには、新島が一八八七年一月三日に彦根から受け取った寄附金などは含まれておらず、後述する神戸の寄附者一覧と同様、正確さには疑問が残る。
- (20) Berry to Clark 1886. 6. 7
- (21) 『五十年史』収載の寄附者名簿と一八八七年十一月段階での「府会議員姓名住所及番号録」(『明治廿一年度京都府会議事録 全』所収)を比較した。人数が不確定なのは、『五十年史』の名簿に、誤記ではないかと思われる人名が複数含まれるためである。
- (22) 京都府医師会医学史編纂室編『京都の医学史』資料編(思文閣出版、一九八〇年)所収。
- (23) *The First Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses* (1887. 4) 『同志社百年史』資料編二に所収(注(3)小野「京都看護婦学校と同志社病院」(1)に和訳文がある)。

- (24) 『東京医事新誌』明治二十年九月十日。このときには、後述の川勝原三に加え、竹内雄四郎とその他当直医三名も治療にあたりと書かれている。
- (25) Berry to Clark 1886. 2. 3
- (26) Berry to Clark 1886. 8. 26
- (27) Berry to Clark 1887. 3. 12. 『京都の医学史』(思文閣出版、一九八〇年)の第五章「同志社病院と京都看病婦学校」は川勝原三につき、「東京医大卒」としており、『百年史』や小野尚香は東京大学卒と理解しているが、東京医大という学校は当時存在せず、『東京大学一覽』にも川勝の名は見当たらないので、経歴はなお不明である。原文には、東京で医学の卒業生となったとしか書かれていない。出身に関しては、「私立看病婦学校開設之義ニ付何並認可書」(『同志社百年史』資料編一に所収)で、船井郡西田村出身の平民と記されている。
- (28) 『日出新聞』明治十九年六月二十四日、明治二十年一月七日。前者「ペルリー氏の治術」は、兵庫県の豪商がペリーの名を聞きつけ、大阪の名だたる医師も治せなかつた眼の治療を受けたところ、全癒したとの話、後者「医者之礼」は、ソコヒの全治に対し薬代以外の「菓子料」を払おうとする患者とペリー側とが押し問答となった結果、看病婦学校への寄附をもって落ち着くという顛末を語る。
- (29) *The Sixth Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses* (1892. 3) 『同志社百年史』資料編二に所収。
- (30) 以下断りのない限り、京都府総合資料館編『京都府百年の年表』4 社会編(一九七〇年)の当該年度年表による。
- (31) 『大日本私立衛生会雑誌』第三十六号(明治十九年五月二十九日)。
- (32) 西川懿太郎『明治十九年医事記』(『京都医事雑誌』第二十二号、明治二十年一月二十五日)。丹後は指定・解除ともに遅くなる。
- (33) 注(5) 拙著第九章「官立学校」概念の輪郭」を参照。
- (34) 塵海研究会編『北垣国道日記「塵海」』(思文閣出版、二〇一〇年)の同日の条参照。
- (35) 同右、および Berry to Clark 1886. 8. 26 に于て(以下も同右)。
- (36) 以下、京都府属の役職や経歴については、前掲『北垣国道日記「塵海」』の諸記述、寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』(寺岡書洞、一九八一年)を参考にした。
- (37) 注(27)「私立看病婦学校開設之義ニ付何並認可書」。
- (38) 前掲『北垣国道日記「塵海」』同日の項に、「新島襄来り、医学学校設立ニ付英国大商某質問ノ事ヲ具申ス」とある。

- (39) Berry to Morton 1886. 7. 8 (Berry to Clark 1886. 7. 12 に添付)。日付不明の新島宛ペリー書簡(注(7)「新島遺品庫」二七七〇)も同様の旨を伝えており、おそらく同時期の書簡であると思われる。この書簡でペリーは、病院用の土地取得のためには、清永府属に面会して説明し、府の公認を得る必要があると新島に伝えている。府の対応上、実際の窓口となっていたのは、この清永公敬衛生課長であり、彼に便宜を図ってもらう必要があったようだ。
- (40) 注(5) 拙著第三章「岡山県における医学・洋学教育体制の形成とアメリカン・ボード」の「おわりに」などを参照。
- (41) 『京都府府会議録事 明治十七年 全』所収の医学校費をめぐる審議をみると、卒業生が無試験で開業できる甲種医学校としての要件である、生徒の臨場実験に必要な患者数の維持に苦慮している。
- (42) 注(39) Berry to Morton
以下、京都府・府会の動向等については、注(5) 拙著第七章「高等中学校医学部時代の到来」および補章「官立学校誘致現象の生成と変容」を参照。
- (44) 一八八六年四月十六日付川本泰年・鎌田助宛新島襄書簡、一八八六年七月八日付川本泰年宛新島襄書簡(前掲『新島襄全集』3)。
- (45) 注(5) 拙著第二章「医療宣教師ペリーと兵庫・飾磨県の行政・社会」を参照。
- (46) 『神戸又新日報』については、西松五郎「『神戸又新日報』略史」(『歴史と神戸』第十八巻二号、一九七九年)を参照。一八八四年五月創刊。兵庫県会議員となる階層が役員に就任し、役員九名のうち四名の名を、看病婦学校寄附者一覧に確認することができる。
- (47) 『神戸又新日報』明治二十年九月十二日。
- (48) 新島襄「出遊記」(『新島襄全集』5 日記・紀行編、一九八四年に所収)。
- (49) 注(9)「会員氏名表」、『明治二十一年一月現在 大日本私立衛生会会員姓名表』によれば、大日本私立衛生会神戸支会のメンバーも多い。
- (50) 『神戸又新日報』明治二十年十一月十二日掲載の「本県会議員姓名番号」と『五十年史』あるいは『神戸又新日報』十二月十八日の寄附者一覧とを比較した。
- (51) 『山陽新報』については、『岡山県史』第十巻近代Ⅰ(一九八六年)の第四章「教育・文化」の項を参照。
- (52) 警醒社書店編『信仰三十年基督者列伝』(日本図書センター、二〇〇三年(復刻))。
- (53) 山陽新聞社編『岡山県歴史人物事典』(一九九四年)。

- (54) 注(40) 拙著第三章参照。
- (55) 『山陽新報』明治十八年十一月二十二日。ペリーは京都に入った後、一度 Ellen Cary (夫の Obit ともに宣教師) の出産の手伝いで岡山を訪問した (Berry to Clark 1886: 1.12)。十二月一日の記事「ペリ氏」によると、京都に「救貧院」を設置するとの報道になっている。なお、『大阪日報』同年十一月十八日も、看病人学校設立のための京都入りを伝える。
- (56) 注(48) 「出遊記」、一八八六年七月三日付北垣国道宛新島襄書簡(前掲『新島襄全集』3)。
- (57) 新島の「英文ノート」(注(7)「新島遺品庫」〇九三二)には三件程度の記載が確認できる。
- (58) 『大阪朝日新聞』明治十九年五月一日、『東京医事新誌』第四百四十三号(明治十九年九月二十五日)。
- (59) 例えば泰西学館の設立経緯などにそれを認めることができる。詳しくは拙稿「明治中期における地域の私立英学校構想と同志社」(『キリスト教社会問題研究』第六十号、二〇一一年)参照。
- (60) 注(48) 「出遊記」。
- (61) 『基督教新聞』明治二十年三月九日によれば、ロンドンの一豪商某が、医学校が設立されれば若干の金を寄附し、スコットランドエジンバラの医学博士を二・三名送ることを申し入れたというが、これはモートンのことであろう。
- (62) 以下、有志東京共立病院・婦人慈善会と看病婦教育所については、東京慈恵会医科大学創立百三十年記念誌編集委員会編『東京慈恵会医科大学百三十年史』(二〇一一年)第一章「建学」、松田誠「高木兼寛の医学——東京慈恵会医科大学の源流」(二〇〇七年)の「看護婦教育の創始」を参照。
- (63) 明治天皇の京都臨幸については、『明治天皇紀』第六(吉川弘文館、一九七一年)を参照。
- (64) 『東京医事新誌』第四百六十四号(明治二十年二月十九日)。
- (65) 一八八七年二月二十一日付新島公義宛新島襄書簡(前掲『新島襄全集』3)。
- (66) 注(48) 「出遊記」。
- (67) 『女学雑誌』明治二十年四月十六日。
- (68) 『日出新聞』明治二十年三月八日・十五日。発会式を経て制定された組織規則は、同四月六日に掲載されている。
- (69) 『日出新聞』明治二十二年一月二十日。
- (70) 本史料は『神戸又新日報』に掲載された広告であるが、『日出新聞』の方には、十三日の日付が入り、「義捐者諸士御中」との一言が末尾にある。この時期の『山陽新報』は現存せず、同紙上での掲載の有無は確認できない。『朝日新聞』や『大阪日報』には掲載がみられない。

(71) 「京都看病婦学校・同志社病院・同志社書籍館開業式順序」(注(7)「新島遺品庫」〇一五一、「同志社百年史」資料編一
所収)。「」内の英字綴りは筆者が補った。

(72) 『日出新聞』明治二十年十一月十七日。

(73) 『The Hiogo News』は、看病婦学校のニュースをそれまでも時折掲載し、好意的な反応をみせていた(一八八七年七月
十九日号など)。なおこの開業式の記事では、デイヴィスではなく伊勢が祈りを捧げたと報じられている。

(74) 北垣のこの日の日記には、開業式に参加した旨のみが記されている(前掲『北垣国道日記「塵海」』)。

(75) 開業式翌日の『大阪日報』明治二十年十一月十七日は、内国人四百十六名から千百三十四円五十二銭、外国人五名から
六千五百円五十銭が集まったと伝えていた。

(76) 以上、東華学校については、注(5)拙著終章、「京都民立医学社」については同第四章を参照。看病婦学校の運営体制
を示した規則類は存在しないが、一八八七年二月六日付中村宛新島書簡(前掲『新島襄全集』3)によれば「看病婦学校
理事委員」を設置していた模様である。なお一八八七年六月作成の『Rules and Regulations of the Doshisha Hospital』(『同
志社百年史』資料編二に収録)によれば、同志社病院は『The Institution will be a branch of the Doshisha and under the
legal care of the Doshisha Trustees.』と記されている。

(77) 名称をめぐってはベリーと新島の方向性の違いが知られている(注(6)『百年史』第十一章)。新島の民間との連携を重
視する姿勢は、一八八三年年頭の「京都民立医学社」設立計画のときから存在し、ベリーと異なる点であった(注(6)
拙著第四章)。史料(D)は、同志社病院にも「京都」が付された事例である。

(78) Berry to Clark 1886. 8. 26

(79) 『同志社百年史』通史編一の第九章「大学設立義捐金募集運動」参照。

〈史料編〉

(A)

(*年代順に配列し、句読点は適宜筆者が付した。)

今般京都ニ於テ看病婦学校設立致候ニ付、江湖慈善家ニシテ此挙ヲ賛成シ金員義捐被成下候諸君ハ、下名迄御送附被成下度候也。

岡山地方寄附金募集委員

明治十九年五月

岡山区難波町七拾番地

加藤 壽

岡山区東中山山下百六番地

石黒涵一郎

〔山陽新聞〕明治十九年五月二十五日(ほか)

(B)

寄附金募集広告

我カ国近年医術日ニ月ニ進歩シ随フテ良医続々輩出スルモ、看病法教授ノ如キハ未タ曾テ其端緒ニ就カスシテ、良医良薬モ不法無術ナル看病人ノ為メニ空シク無効ニ属シ、治スヘキノ疾病モ終ニ治スヘカラサルニ至ルノ不幸ヲ免カレサルモノ、蓋シ少ナシトセス。尤モ父母或ハ妻子ノ看病素ヨリ親切ナラサルニアラサルモ、如何セン看病其法ヲ得サルニヨリ其親切ハ却リテ患者ヲ傷害スルコトナキニアラサルハ寔トニ遺憾トスル所ナリ。故ニ欧米諸国ノ如キハ夙トニ看病婦学校ノ設ケアリテ専ラ生徒ヲ募集シ、以テ看病ノ方法ヲ教授シ他日實地ニ着手スルノ日ニ当リテハ、大ニ良医良薬ヲ助ケ共ニ相須□テ効ヲ奏スルノ実アリ。是ニ於テカ今回京都同志社新島襄氏外数名ノ發起ニテ同地ニ一ノ看病婦学校ヲ設置シ、広ク生徒ヲ募集シテ此ノ校ニ入レ一年六月ヲ以テ修学ノ期限トシ、最初ノ一年間ハ論理的及ヒ応用的ノ教授ヲ為シ残ル六月間ハ専ラ患者ニ接シテ實地看病ノ經驗ニ従事セシメ、凡ヘテ束修亦ハ月謝ヲ要セス社会公共ノ為メニ此ノ義挙ヲ企ツルニ際シ、幸ヒナル哉曩キニ米國看病婦学校ニ業ヲ卒ヘ其後英仏等ノ各国ヲ遊歴シテ到ル処ニ看病婦学校ノ実況ヲ視察シ最モ看病ノ方法ニ熟達シタル米國婦人リンダ、リチャード氏ノ偶マ我カ国ニ渡来スルアリ。依リテ同氏ヲ聘シテ教師トナシ、且ツ此ノ校ニ連帶スル一ノ病院ヲ設置シ以テ實地經驗ノ便宜ニ供シ、元神戸万国共同病院長兵庫県病院臨時出張医士及ヒ岡山病院顧問タリシ米國医博士ベルリ氏ヲ請シメ同院ノ管理ヲ托シ、共ニ力ヲ看病婦ノ養成ニ尽サレントス。然ルニ此ノ校タルヤ元社会公共ノ為メヲ謀ラントスルノ義挙ニ出テシモノナルヲ以テ、之レカ創立ニ際シテハ普ク江湖慈善家ノ賛成ヲ仰カサルヘカラス。我々ニ於テモ亦タ大ニ此挙ヲ賛成スルモノナルガ、思フニ本県下ノ多キ必スヤ我々ト意ヲ同フシテ此ノ校ノ創立ヲ賛成スルノ余リ、金円ヲ義捐セラル、モノ亦少ナカラサルヘシ。就キテハ其金円ハ下名ヘ宛テ多少ヲ論セス惠投セラレンコトヲ敢テ大方ノ慈善家ニ敬告スルコト爾リ。

明治十九年九月

神戸下山手通七丁目 川本泰年

同 栄町通五丁目 木村勉

同 北長狭通五丁目 小磯吉人
同 栄町通六丁目 五州社

〔神戸又新日報〕明治十九年九月十二日ほか

(C)

京都看病婦学校は内外慈善有志家の寄附を得て此度愈々設立する運びに至り候へとも未だ十分の資力なきより猶ほ諸方慈善有志家の寄附の預かり度趣、附ては右学校へ寄附被致度御方は弊社に於て御取次可申上候間此段此に広告す。

二十年三月九日

警醒社

四方有志諸氏御中

〔基督教新聞〕明治二十年三月九日

(D)

京都看病婦学校義捐者諸士ニ告ク

拝啓兼而諸士の高庇と義捐とに因り新築に着手せし京都看病婦学校並同志社病院之義、今般益々竣工之運びに立至り候段、社一同感謝之至りに不堪候。因て聊か右喜悦之微意を表せんが為め恩顧の諸士を聘し、本月十五日午前第十時より午後第一時半までの中随意に同所の縦覧を請ひ、同二時より同所手狭に付同志社公会堂を借受け開業式施行致し、右終り次第、幸ひ同志社書籍館落成に付き右開館を兼ね、同所において同志社英学校と謀りて茶菓を呈し度候間、何卒御繰合御来臨被成下度、先は御礼を兼ね右御案内迄、草々拝具

明治二十年十一月

京都看病婦学校
京都同志社病院

〔神戸又新日報〕、『日出新聞』明治二十年十一月十三日